

大内かわら版 NO.11

大内地区の「地域の教科書」

- ①暮らしに関することをまとめたもの（行事・役割、慣わしなど）
- ②地域の魅力・特徴などをまとめたもの

目的・効果

〔移住希望者〕大内のことを知ってもらい、知ったうえで移住してもらう。選んでもらう。

〔大内住民皆様〕・地域の魅力など認識の再確認をする。
・在住行政区以外の行事・団体などを知る。

〔出身者・若い世代〕地域の魅力などを情報発信し理解してもらう。

「地域の教科書」づくりの今後のスケジュール

第4回の「地域の教科書づくり推進会議」開催が10月17日（火）に決定しました。皆さんからご協力頂いた情報をもとに整理したものを提示し、それについてどう思い、改善方法や修正点などを考えるような場を設ける予定です。先号まででもお伝えしているとおり、**その後皆さんにも確認頂きます。**



推進員の皆さんだけではなく住民の**皆さん自身が、大内地区のことについて話し合える機会**があることは、**自分達の地域を自分達で守っていく**という自治力向上にも繋がります。この大内が住みよい場所となり、次世代の若者や子供達の**大内愛をさらに育ていける機会になれば**と考えてまいります。

移住事業・交流事業とは？ <4>（世代の交流も交流事業）

住民ひとりひとりが地域を元気にしよう！という取り組みが各地で行われるなかで、地域に伝わる歴史やお祭り・郷土芸能などの伝統文化を継承されている方達が子供達など次世代につなぐことで、**地域全体が活性化**がする例もあります。今回はその取り組みを紹介します。



兵庫県にある歴史博物館「小野市立好古館」では、地域の小中学生・保護者・教員・老人会・子供会・行政関係者など、**地域住民ひとりひとり**が協力し「**まち**」そのものをテーマにした企画展を開催しました。

子供達がグループになり「まちの由来や伝承・年中行事・神社・石碑・屋号など」について、**両親や祖父母、地域の高齢者から聞き込み調査**を行い作り上げられた企画展には、調査を行った子供達や聞き込みに協力してくれる人をはじめ、2週間で**1,000人を越える地域住民が足を運んだ**と言います。

自分の知識が活かされることで高齢者が元気になるばかりか、次代を担う子供達も、**知らずに過ごしていた故郷の文化を受継ぐ**ことができるとともに、同じ地域に住んでいても**直接接することがなかった者同士が顔見知りになり、地域の結束を固める**ことにもつながったそうです。



他地域では、同じような取り組みをする際子供達に加え、**移住者の新しい視点**を入れることで**地域を見直すきっかけ**になったという事例もあります。

このように世代を超えて**地域住民ひとりひとりが地域づくりに関わる**ことで、地域に対する親しみの気持ちを高め地域全体の活性化につながる**世代の交流も交流事業のひとつ**です。

大内各地区の出来事や催しなど（9～10月中旬）



まるもりザンビアプロジェクトでザンビアの方5名を中心とした皆さんが視察研修 9/28

視察先として「農事組合法人羽山の里佐野」「大内活性化施設管理組合」「大内ふゆみずたんぼ生産組合」「佐藤吉市さん宅」を視察され、集団での農業や環境保全農業・生産現場などを学んでいきました。



蚕の繭（晩秋蚕）蒸し 9/27

佐野地織保存会で糸とり・真綿づくりのための作業が行われました。



稲刈り&彼岸花

彼岸花が映える季節。田んぼは黄金色となり稲刈り作業も始まりました。



大内保育所運動会 9/30

保育所内が子供達の元気な声や保護者の笑顔で包まれていました。

身近で無理なく出来る交流事業の事例

●「手作りのむらづくり」集落に若者を呼び戻す

（岩手県二戸市）

・住民全員で集落をくまなく歩き、集落点検地図を作成し強みと弱みを把握しています。全戸参加の話合いで計画を取りまとめました。

・きっかけは、盆や正月に息子夫婦や孫が帰省しなくなったことに危機感を持ち、集落に若者が帰ってきやすい環境を作りたいと思ったからです。

・取り組みを始めて以降、年間を通じ幅広い世代が交流するイベントや都市住民との相互交流を実施しています。結果4名の若者が都会からUターン就農。集落の人口も減少することなく横ばいで推移しています。



●里の案内人（山口県周南市）

・「里の案内人」という移住者が地域に溶け込むお手伝い。

・地元住民の視点で、暮らし方の相談を受けるとともに、地域の空き家の実態調査も行っています。

・結果、移住者が地域の担い手として地域に溶け込みやすくなり、空き家対策にもなっています。



●プチ送迎ボランティア（長野県松本市）

・住民による近隣のスーパーや医療機関への送迎。

・設立のきっかけは、日常の買い物や通院等に困っている高齢者の「足」の問題が顕在化。

・大学生と協力し実態調査を行いました。現在は住民主体のボランティア組織を設立しています。そして今では週3回の送迎が高齢者の「足」として定着しました。



●高齢者等支援対策チームささえ

（青森県青森市）

・地域住民で日常的に見守り、恒常的に高齢者・避難困難者を支援。

・きっかけは地域の高齢化が進み、一人暮らしの老人が増え避難困難者が増加。

未来に不安を抱いた住民が民生委員や地域包括支援センターに頼るだけでは…と立ち上がりました。

・組織発足後、雪かきや災害時の避難誘導に加え、普段からの声かけなどを実施することで、よりきめ細やかな生活支援が可能になりました。

